
夜明け

micky

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夜明け

【Nコード】

N1471B

【作者名】

m i c k y

【あらすじ】

あれから半年。君に僕の声は届いているのだろうか？

1話（前書き）

無謀にも連載いきます。

よくあるストーリーかもしれませんが読んで頂けたら幸いです。
文章が変かもしれませんが許して下さい

1話

俺はいつも待たせてばかりだ。

ゴメンな、蘭……。

君が目を覚ます時に側にいたいけど。

その時に俺は君を幸せに出来る男になっているだろうか？

体が元に戻り、今までの事が嘘のような毎日。
小さくなる前よりも忙しい日々。

時間の合間をみて、毎日君のところへ。

花屋の店員とも顔なじみになってしまっ

「この花は、この前と同じ花ですけど宜しいですか？」だって。

俺はそういうところは疎いから助かるけど、

「彼女は幸せですね」

なんて言われて苦笑してしまった。

あの日から

蘭は眠ったまま……。

俺が追い詰めた犯人が警察から逃れ、そいつが近くにあった車に乗り込んで急発進し、ボールを追いかけて公園から出てきた女の子がひかれそうになった時だった。

一瞬の事だった。

俺の少し後ろにいた蘭がなにか言っただと同時に俺の目の前で。

蘭が女の子を抱え込むようにして……。

女の子は無事だった。傷一つ無く両親の元へと帰って行った。

蘭は……。

一命は取り留めたが、頭部の外傷がひどくずっとICUにいた。

今は一般病棟の個室に移り過している。

俺は蘭のおっちゃんとおばさんに殴られる事を覚悟していたが、責められる事はなかった。

いつそ殴られた方がよっぽどいいし、誰かに殴られたかった。

おっちゃんは最初だけ毎日来てたけど、今は二日に一回面会に来て
ているだけ。

俺と廊下で合うと

「来てたのか…」

とだけ言つと蘭に合わずに帰って行く。

そんな事が何度か続いた時の事だった。

以前に病院の入口で偶然会った時、俺はおっちゃんにやつと謝ったが

「悔しいが…蘭にはお前が必要だ。本当ならそばにいてやりてえが
…な。いつか、こうなるかもとは思っていた。危ない事件にも俺も
アイツを連れまわしたからな。俺の側にいてもお前の側にいてもき
つと同じだろうよ」

タバコを加えながら空を見上げ

「こんな事になっても蘭の奴はお前を想っているんだろうな。どん
なに危険な目にあっても……。誰に似たんだかしらねえが」

お前を恨んじやいねえよ

と言つと病院を去って行つた。

蘭が眠りについて半年。

「蘭。今日はいい天気だけど外は寒いんだぜ。雪が降るかもと天気予報で言っていたし。」

ほら・・・蘭にもらったマフラーを今年もちゃんと巻いてる。これならオメーも怒らないだろ？」

俺は近くにあった椅子に座り、蘭の白い手を握った。

「そうだ。昨日からうちの親父たちが帰ってきているんだ。かあさんは今日ここに来るって言ってたから、うるさいだろうけど話を聞いてやってくれな」

蘭はなにも語らない。

正直、蘭を見る度に守れなかった悔しさが増していき
苛立ちに似た悲しさが俺を覆うんだ。

コンコン。

病室の扉が開き

「蘭！園子様だぞ。・・・あつ・・・」

「いいよ。俺も今帰るところだから」

俺は園子に椅子を譲り、ジャケットに手を通していると

「新一君・・・」

「・・・ん？」

「ねえ、蘭・・・ずっとこのままなのかなあ・・・」

「・・・」

「私にはなにも出来る事はないのかなあ・・・」

「・・・こんな立派な病院を紹介してもらって個室にも入り、面会の時間が定まらない俺やおっちゃんの為に面会の制限を緩めてもらったり・・・園子は最高の蘭の親友だ」

「でも！」

「俺のほうが・・・よっぽど役立たずさ」

「新一君？」

「もう時間だ。行かなくちゃな。蘭の側にもゆっくりといてやれないなんて。本当に最低だよな」

園子は何か言いかけていたが俺は病室の扉を閉めた。

事件が解決しても心は満たされない。

ここ半年はただ現場へ行って犯人を挙げるだけのような、そんな感じだった。

「そういえば親父達が帰ってきていたんだっけな」

思い出して家路にむかう。

送ってくれるという高木刑事達も蘭の話題はさけている。皆、気を使ってくれているのが痛いほどわかる。

「大丈夫かい？」

車を降りるとき、高木刑事が心配そうに俺をみた。

俺は大丈夫と軽く手をあげて家の門をくぐった。

自宅に入るといつもは冷え切った部屋が暖かった。

親父が暖炉の前の椅子に座っていた

「おかえり新一。お疲れさん。久しぶりだな」

懐かしい声だった。

「おかえりって私が言うのも変な感じだな。まあ、いいからここに座れ」

俺は黙って親父の前に座った。

親父はじつと俺をみていた。

「なんだよ」

親父はゆっくりと口を開いた。

「アメリカに來い。」

何度も聞いた言葉だった俺の答えはいつも

「俺は日本にいと決めたんだ」

そう、蘭の側にいたいんだ。

「これは蘭くんのご両親のお願いでもあるんだ」

「！」

「いいか。新一よく聞くんた。お前の蘭くんへの想いも勿論知っている。

愛しい人がこのようなことになって、自分を責めているのもあちらに聞いている。」

俺は下を向いて話の続きを聞いた。

「はつきりいうが、今のお前のままでは蘭くんには相応しくない」
「・・・」

「蘭くんが目覚めたときに相応しい男になるんだ」
「・・・でも」

蘭が目を覚まして俺がいないと悲しむかもしれない。

「お前は未来がみえていないらしいな。そして自惚れている。自分

がないと蘭くんが悲しむとか、日本の犯罪には自分がいなくてはならない・・・とかな」

確信をつかれて

「俺は・・・！」

「蘭くんを幸せに出来るのはお前かもしれないが、今のままでは幸せには出来ない」

「・・・」

「・・・3日やる。ゆっくり考えるんだな」

1話（後書き）

時間は3日。新一の気持ちは変わるのでしょいか。

2話／2日目（a m）（前書き）

何とか次を書くことが出来ました。文章が変かもしれませんが読んでいただけたら幸いです。

2話 2日目 (a m)

その夜は眠れなかった。

何気なく見た窓の外には星が空一面に輝いていた。

「蘭にもみせてやりてえな」

何故か急に冷たい風にあたりたくなった。

「・・・さぶっ」

月明かりの庭に蘭と一緒に植えた花が枯れかけていた。

「参ったな・・・蘭に怒られるだろうな」

鉢植えを代えて少し水をやり終え

「こんなもんか・・・な」

手についた土をはらい星空を見上げた時

携帯が鳴った。

―着信―服部平次―

『おう工藤！起きとつたんか？』

「まあな。何か用か？」

『いや、用は用なんやけど。俺は止せって言つたんやけど、和葉がな・・・ねえちゃんの見舞い行くいうてな』

「なんで？来ればいいじゃん。蘭も喜ぶよきつと」

『んゝそやけどな・・・いや実はな、俺らさっきケンカしてもうて
「・・・飽きずによくやるな」

『そうやねん。あいつほんまムカツクンやで。あんな・・・ちやうちやう、そんな話やのうて』

俺は相変わらずな服部に久しぶりに笑みがこぼれた。

「はは……。なに一人で言ってるんだよ」

『そやなくて、和葉が一人で東京に行ってもうたんや』

「いつ？」

『そやからさつき』

「……」

『後で俺も追うさかい和葉迎えに行ってくれんやろうか』

「別にいいけどよお……」

『あゝ助かったわあ。ほんならよろしゅう頼むで』

「……ああ」

通話を切って時計をみる。

和葉ちゃんが来るまでまだ時間がある。

ー蘭、きつと喜ぶだろうなー

俺はベッドに戻り蘭の笑顔を抱いて眠った。

朝早く東京駅に行くと和葉ちゃんが丁度改札口を降りて来る所だった。

「和葉ちゃんこっち！」

「工藤君！」

俺がいることに驚いて小走りに走ってきた。

「なんでここにおるん？」

不思議そうな和葉ちゃんに

「服部が連絡してきたんだよ。皆心配してるよ？（特に服部が・・・）」

「平次が？」

少し赤くなっている彼女の荷物を俺が持とうとしたら。

「えっ！ええよ工藤君！自分の荷物くらい自分で持っし」

「大阪から疲れただろう？いいよ、この位たいした事ないってヒョイっと俺は大きな荷物を持ち歩き出す。

「・・・さすが工藤君。平次とは大違いやわ」
そう言くと俺の横に並んで歩き出す。

「おおきに。滅多にない事やし甘えさせてもらっわ」

タクシー乗り場まで一緒に行き、そのまま蘭のいる病院へと向かった。

病院はまだ外来前でとても静かだった。

「いやあ〜でっかい病院やなあ」

和葉ちゃんの声が響き渡る。

701号室 毛利 蘭

「ここにおるん？」

「ああ」

扉を開けると蘭はやっぱり眠ったままだった。

いつもこの扉を開けた時、「新一」と言って笑顔を俺に向けてくれるんじゃないか・・・って。

いつも心のどこかで期待してしまうんだ。

「蘭ちゃん。和葉やで。わかる?」

和葉ちゃんは涙を溜めながら一生懸命に笑顔を作って蘭に話しかけていた。

「平次が会いに行ったらあかん言うて、来るのが遅くなってしまったわ」

「服部が?」

彼女は振り向かず俺の問いに答えた

「うん。蘭ちゃんの事も辛いけど、工藤君はもっと辛いだろうからって。今はそつとしときって」

「そうなんだ・・・」

「でも、やっぱり会いに来たくて。蘭ちゃんは私の友達やし、アタシが辛い時いつも相談に乗ってくれてたし。せやから、どうしても会いにきて何か出来たらって思ってたんやけど・・・」

蘭の顔をみながら

「アタシには何も出来けへん。平次の言う通りやった」

みんなが蘭に何かしてあげたいと思っている。

蘭は本当にみんなに愛されているんだ。

「お昼前には服部も来るらしいから、それまで蘭の話し相手でもしてくれる？」

「うん、そやね。よし！」「うるさい！」言うて起きてくれるまでいっぱい話したるわ」

少し元気になった和葉ちゃんに安心し、俺は病室を出ようとした時

「工藤君、何処にいくん？」

心配そうな彼女の顔が蘭とダブってみえてしまった。

「え・・・っと。ちよつと仕事があつて・・・すぐに戻ってくるから」

「仕事？大変やね。・・・あんな工藤君ちよつと話があるんやけど。仕事の後でもいいから少し話を聞いてもらつてええかな？」

「今でもいいよ、何？」

和葉ちゃんは慌てて

「ここでは蘭ちゃん聞いてるからあかねん。後でいいから・・・」

「わかった。すぐに戻ってくるから。・・・蘭の事よろしく頼むね」

「まかしとき！頑張つてな」

彼女の明るい声と笑顔に見送られ病室を後にした。

俺はやっぱり蘭をこれからも近くで見守っていたい。

アメリカ行きは断ろう。

仕事をサツサと片付けていつもの花屋へ。

クリスマスも近いせいか赤い花が多く感じた。

「ポインセチアか・・・早いな。もう、そんな時期か」

去年は蘭と一緒に過ごしたんだよな。

俺の家でレモンパイを作ってくれたんだっけな。

「また食べたいな・・・蘭」

俺は蘭との思い出をかみ締めながら病院へと急いだ。

病院に戻ると和葉ちゃんが蘭の髪を梳かしていた。

「きれいな髪やね。アタシ、クセ毛で大変なんよ。朝なんて髪だけでかなり時間かかるし・・・。そやのに「馬のしっぽ」って平次がからかうんやで。本当に女の子の気持ちが全くわかってないやろ？」

蘭の笑い声が聞こえてくるようだった。

「あつ！工藤君帰ってきたで。良かったなあ蘭ちゃん。ちょうど綺麗になったところや」

蘭が照れながら困っているようだった。

「工藤君？」

判ってるさ・・・。

俺が願う蘭はそこにはいないんだ・・・。

俺は顔に手を当てて気がついた。

俺は泣いていたんだ。

あの事故から半年。

一回も涙は流さなかったのに……。

「工藤君……」

和葉ちゃんの声に我に帰り急いで涙を拭った。

俺の前に歩み寄りハンカチを差し出され

「我慢したらあかんよ。泣きたいときは泣いたらええねん。そうせ
なな、前には進めんとちゃう？」

和葉ちゃんの一言一言が心にしみた。
だけど

「ハンカチありがとう。もう、大丈夫だから」
と言っていつもの顔に戻ってみせた。

「なんか……違うんよ」

「……なにが」

「ちょっと廊下に出てもらってええ？」

和葉ちゃんは俺に缶コーヒーを買ってきてくれた。

「悪いな。ありがとう」

「ええよ、アタシも飲みたかったし」

俺達はコーヒーを飲みながらしばらく沈黙が続いた。

「あんな」

最初に沈黙を破ったのは彼女だった。

「蘭ちゃんが前に私に言った事……。平次の事件を解いている時の顔ってな。メチャクチャかっこいいねんって私言った事があるんやけど」

「うん」

「蘭ちゃんも同じやて」

「……」

「工藤君の事件を解いている時の顔が好きやって言うってたわ」

「……」

「勿論、工藤君は優しいしかっこええけど……。なんかな、今はキラキラが足りんような気がするねん」

「……」

「工藤君は探偵が夢やってね。蘭ちゃんに聞いたことがあるけど、それは今も変わらない？」

彼女の言葉達が昨日の親父が言っていたことと混ざって

俺のなかで何かが渦巻いていた。

蘭が目覚めた時、その瞳に映った今の俺はどういう風に映るのだろ

う
.
.
.
。

2話 2日目 (a m) (後書き)

和葉ちゃんはかわいいですよねぇ♪ 次回は服部君が登場します。

(私、大丈夫かしら・・・?)

新一君に残された時間は一日半。

3話 2日目 (pm1) (前書き)

なんとか3話を書きました。毎回言いますが文章がおかしいかもしれません・・・怒らず読んでいただけたら幸いです。

3話（2日目）（pm1）

「工藤君？」

俺はハツとして

「ごめん・・・何？」

和葉ちゃんが覗き込むように俺をみている。

「何って・・・大丈夫なん？なんか顔色悪いで」

心配性なところは蘭と一緒にだな。

「大丈夫。心配ないよ。考える事があって、昨日夜更かしをしたんだ」

「ならええけど・・・」

なんとなくジツと見られて目を離せないでいた。

その時

「なんや、オレは邪魔みたいやなあ」

とジト目でこつちを睨んでる服部がいた。

「平次！遅いやないの」

「アホか！お前がさっさと新幹線に乗って東京へ行ったんやろが！」

「そやかて、平次はいつも今度今度いうて嘘ばかり言うんやもん」

「ほお！誰が嘘言うたんじゃ。何時何分何秒にいうたかいつてみい！」

久しぶりに服部をみたが

「（・・・いつまでもガキだな）服部が悪いって。俺に気を使い過ぎなんだよ。そして・・・」

2人は少し黙り俺のほうをみた。

「ここは病院だ。夫婦喧嘩なら外でやってくれ」

それだけ言つと俺は蘭のいる病室へと戻つた。

しばらくしてから服部が部屋に入ってきた。

「悪かつたな」

ぶつきらばうな言い方はこいつの照れ隠しだ。

「ああ、全くだよ。場所を考えて今度からは喧嘩しろよ」

「ちやう。見舞いに来んかつた事や・・・」

「・・・ああその事か。別に気にしてないから心配すんな」

俺達は病室のベランダへと移動した。

すると服部が先に話し始めた。

「オレなりにいろいろ考えたんや。もし、和葉がねえちゃんみたいになつてしもうたらつて」

「・・・で？」

「俺はきつと自分責めるやろつし、みんなの励ましが逆に重く感じるかもしれへんなつて」

「・・・」

「ねえちゃん意識が戻るまで、オレらは東京に行くのはやめようつていうたんや」

俺は外の景色をみながら服部の言葉を聞いていた。

「なのにあのボケが一人で先走つて来てしもうて」

「そうか・・・こつちこそ悪かつたな。いろいろ気を使わせて」

俺達はそのまましばらく冬の街並みを眺めていた。

「親父にアメリカに來いって言われたんだ」

服部はゆつくりとこつちをみた。

俺は話を進めた。

「俺は蘭のそばにいたい。責任からじゃない。理由もない。．．．ただ、そばにいたいんだ。だから断ろうと思っている」

俺は外から蘭のほうをみつめた。

「思ってるちゅう事は、迷ってるんやな．．．」

「さつき、和葉ちゃんに聞いたんだ。蘭が．．．推理をしている俺の顔が好きだつて言っていたらしい」

「へえ．．．」

俺がそのまま黙り込むと服部は頭を掻きながら

「もし．．．やで。ねえちゃんが今回の事故がなくて元気に過ごしていたとしたらお前はどないしたんや？」

「俺は．．．」

黒の組織は壊滅した。

もう、俺の事で狙われる事もない。

元の体に戻って蘭と一緒にいれる様になった。

それはとても幸せだった。

「俺は．．．自分を試してみたい。世界をもっと見てみたいし、そんな俺を見せたいんだ．．．蘭に．．．」

俺の中に秘めていた想いを初めて口に出して言った。

服部は目を閉じてフツと笑った。

「そうか」

「ああ」

それだけ言つと俺は高い空を見上げた。

俺達はベランダで話し込んでいた。

和葉ちゃんがいつの間にか病室に戻っていたのがみえた。

「蘭ちゃんなら、アタシの気持ち分かってくれるやろ？アタシも蘭ちゃんの気持ちが分かるから」

ベットサイドでなにか話しているのがみえた。

「うちな・・・決めた事があるんや。まだ平次にも言っていないんやけど」

蘭の手を握りしめ

「大阪を・・・日本を離れようと思つてゐるんや」

3話、2回目（p31）（後書き）

和葉ちゃん！ややこしくしないで！！

4話 2日目 (pm2) (前書き)

今回、少し文章が少ないですが・・・。
新一の決断編です。

4話（2日目）（pm2）

俺は服部と最近あった事件の話に夢中になっていた。

「・・・でオレは解ったんや」

「でもその場合、この可能性も考えるべきじゃないか」
お互い会わない間の経験が心を熱くさせた。

ベランダの窓が開き

「いつまでもそんな所におったら風邪ひくで」

和葉ちゃんも寒そうに体を震わせた。

「うるさい女やのう。今面白い話しとるんや。あっちで姉ちゃんと話でもしとき」

「平次はええで。風邪ひかんさかい。そやけど工藤君は中で暖まったほうがええんとちゃう？何か温かい物でも飲む？」

「おい！こら和葉！なんでそんなに扱い違うんや」

「知らん！」

そう言う俺は中に入れられ、服部は外に締め出されてしまった・・・。

「さっきの話聞こえたんやけど」

「？」

「アメリカって」

「・・・ああ」

「行くん？」

「いや・・・やっぱり蘭を放ってはいけないから。・・・今はまだ無理だよ」

俺は蘭の顔を見る。

「あんな・・・」

和葉ちゃんは真剣な顔で俺を真っ直ぐとみた。

「うちが蘭ちゃんやつたら絶対に行ってほしいって思ってるよ」

和葉ちゃんはそう言うのと切なそうに蘭を見た。

「蘭ちゃん・・・可哀想やわ。自分のせいで工藤君が立ち止まってるのを見てても何も言えないなんて」

「・・・」

「そばにいただけが幸せちゃうよ？蘭ちゃんの好きな工藤君が蘭ちゃんの幸せなんよ？」

「蘭の好きな俺？」

ゆつくりと頷いて言葉を続けた。

「ただそばにおるだけではあかんねん・・・」

和葉ちゃんは服部のほうに視線を移した。

「和・・・葉ちゃん？」

服部はベランダで携帯を使って真剣な話をしていた。多分、事件だろう。

そんな服部をみる和葉ちゃんは幸せそうだった。

が、

「離れるのは辛い。誰だってそうや。でもな、夢を諦めて後悔してまで一緒におってもあかんねん。蘭ちゃんはきつと応援してくれてる」

「・・・」

「アメリカで頑張ってた。そして蘭ちゃんを迎えに来てあげて」

ーその時、眠っている蘭が一瞬微笑んだようにみえたー

そうなのか。

蘭と離れる事に怯えているのは俺の方なのか。

俺はいつでも蘭の側にいたし、何よりもいたかったんだ。

そばで守ってあげるといいながら

俺は・・・蘭に守られていたんだな。

蘭、君を守れる男になりたい。

君を世界中で一番幸せにしたい。

君の悲しい顔はみたくない。

俺が俺らしく生きていく事で君がそばにいてくれるなら・・・。

「蘭・・・」

そつと蘭の細く白い手を握った。

「俺・・・アメリカに行つてくるよ」

俺は蘭にそう告げた。

また蘭を待たせる事になるな。

でも蘭が眠っている間に自分に出来る事をやってみようと思う。

蘭に好きでいてもらえる男になるために。

そして

「そして絶対に蘭を迎えにくるから」

4話 2日目 (pm2) (後書き)

まあ、皆さんの予想通りでがっかりしましたでしょうか？
仕方ありません。はい」 (へ) (「

5話〜3日目〜（前書き）

文章が読みにくいと思いますが・・・（毎回言ってるけど）気長に読んで下さい。
それではどうぞ。

5話 3日目

その夜、俺は病室に泊まり蘭のそばにずっといる事にした。

アメリカ行く事を親父に報告をした。

「そうか・・・よく決心したな」
と言われた。

もうアメリカに行く事に迷いはないが、それでも蘭の事は気がかりだった。

そういえば服部たちは俺のうちに泊まっている。

「さすが工藤やのう！ほんま助かるわ」

「ほんまにええの？」

「ああ、親父たちにも言っておくから」

そう言って病院の入り口まで送って行った。

最初、ここに泊まる気できたらしいが・・・

あの2人がいたら蘭と2人きりになれないからな。

今夜はずっと蘭の顔を見たい気分なんだ。

「蘭・・・」

俺は蘭の長い黒髪に手を伸ばしそつと触れた。

「愛してる」

何度も何度も言っておきたかったんだ。

君は何も言わないけれど…きつと…。

フツと外に目を移すと白い雪が舞い始めていた。

明け方、病室に園子がやってきた。

園子はほとんど毎日のように見舞いに来てくれていた。

今日は用事があつて早くに来たと言う。

園子にも言っておかなきゃいけないな。

俺はアメリカに行く事を伝えた。

「そう・・・本当なら日本で蘭のそばにいてほしいかったけど・・・」

園子は腕を組み少しため息をついて下を向いてしまった。
当然怒るよな・・・

だが違った。

「蘭の事は私に任せて。もし、蘭の意識が戻ったら・・・その時は真っ先に新一君に連絡するから。そしてお願い。今度こそ・・・そばにいてあげて」

そう言つと涙を溜めて真っ直ぐに俺をみた。

園子が蘭の親友でよかったと心から思った。

「蘭の事、よろしく頼む。俺に出来る事があつたらいつでも言うてくれ」

「わかった。何かあつたら・・・」

そう言つと園子は考え込んでしまった。

「じゃあ、さっそくだけど・・・」

もうかよ・・・。

「今夜、またここへ来てくれる？誰にも言わずに。約束して。誰にも言わずにだからね」

「？」

不思議そうな俺に園子は

「出来るの？出来ないの？」

「わかった・・・そうだな、事件が終わり次第くるようにするよ」

「えゝ、なにそれ！」

「出来るだけ早めに片付けるようにするからさ」

園子は嫌味っぽく笑い

「出来るの？そんな事？」

と俺に言ってきた。

そんな園子に

「俺は工藤新一だぜ？」

と言うと俺達は笑った。

「その顔……うん。そうと決まれば……そろそろ行かないや。私が夜に間に合わなくなっちゃう！」

時計を見て園子が慌て始めた。

「じゃあね蘭！新一君も後でね！」

そう言うとお園子は嬉しそうに病室を飛び出して行った。

少し騒がしかった病室がまた静かになった。

ベットサイドの椅子に座り手を組んで蘭に話しかける。

「蘭、俺は安心して向こうに行けるな。蘭には皆がそばにいるから。だけど……」

スースーと寝息を立てている蘭。

今にも起きそうなにな……。

「だけど蘭を幸せにするのは俺だからな。目が覚めても忘れるなよ」
俺は蘭の鼻をチョンと軽く指で突いて微笑んだ。

午後から事件現場に行くと何故か服部がいた。

「なんでいんだよ」

俺が真っ先に言った言葉だ。

「なんで……って。事件がオレを呼んだからに決まっとるからや

ないか」

するとすぐ後ろにいた和葉ちゃんが

「買い物に出かけたらパトカーがぎょうさんおつてな。無視して行こうとしたら、平次がいつの間にか横におらんねん」

すると服部は

「まあまあ、そんな小さい事気にすんなや。買い物なんていつでも行けるよつて。工藤も今回は出番なしやな。犯人ももう解つてもうたで」

おいおい・・・本当かよ。

「まあ、あれやな。お前が日本におらんでも、服部平次が一人おればええちゆうこつちゃ」

「服部・・・」

「はよアメリカでもどこでも行つてこいや」

「・・・」

言葉に詰まっている俺に和葉ちゃんが

「そやね。日本の事は平次に。世界の事は工藤君にまかせたらええねん」

それを聞いた服部は

「はああ？それはなにかい、俺は工藤の小指の爪位とでもいいいたいんか」

「なんで平次はすぐそんな事を言うん？意味わからんわ」

まだまだ続きそうな2人の会話に思わず笑ってしまった。

「なんや工藤もそう思うてるんか？お前らシバクぞ！」

「な？工藤君。意味わからんやろ？」

困ったような和葉ちゃんに

「ああ。服部がやきもちを妬いているつて事は分かったけど」

と言うと和葉ちゃんが

「工藤君に？何で？」

俺は服部を連れて和葉ちゃんから少し離れた。

「服部も大変だな」

と言うと

「工藤・・・こんなん序の口やで」
と2人で大きなため息をついた。

そんな俺達を首を傾げてみている和葉ちゃんがいた。

もう一つの事件が飛び込んできたが、服部がいた事もありすぐに解決してしまった。

服部達は買い物があるからと途中で別れた。

俺は園子との約束もあり、また病院へと急いだ。

5話〜3日目〜（後書き）

メモ

蘭ちゃんの病室は園子が用意してくれたので、個室というよりは特別室に近いので、急な宿泊にも対応してもらえます。

（m i c k y）

こんな話の流れですがいいのでしょうか・・・（悩）

6話 3日目 (pm) (前書き)

園子の surprise。和葉の未来。

文章に自信がないですが、読んでいただければ幸いです。

6話 3日目 (pm)

俺が病院に到着すると入口で園子と…あれは京極さん？

「お久しぶりです。お元気でしたか？」

やはり京極さんだった。

「ああ、京極さんもお元気そうで」

俺達は軽く握手を交わした。

以前、蘭と園子と京極さんとでトロピカルランドへ遊びに行った事がある。

蘭が京極さんと空手の話で盛り上がり、俺と園子は話し合って別々
に行動したんだっけな。

俺がクスツと笑うと

「どうかしましたか？」

と不思議そうな顔をした。

園子はなにかメールをしていた。

「新一君。私ちよつと先に蘭のところに行ってるから」

そう言つとサツと俺達から離れた。

「じゃあ、僕も行きます」

慌てたように京極さんも後を追う。

「真さんは新一君とゆっくりと来てちょうだい」

「…わかりました。何分後に行けばいいですか？」

2人でコソコソと話を始めた。園子は京極さんにウインクをしてエ
レベーターで先に行ってしまった。

「じゃあ、外でも行きましようか？」

「いや、蘭の顔を先に見に…」

「いいから行きましよう」

半ば強制的に外へ出されてしまった。

「あなたに話したい事がありました…」

「俺に？」

「はい。園子さんの事です」

俺に園子の事ってなんだ？

「蘭さんが・・・その…事故に遭われてから園子さんは僕に会ってくれませんでした」

「！」

「何度も連絡をしました。家にも行きました。だけど自分だけ幸せにはなれないと・・・」

俺達は近くにあったベンチに座った。

「そして昨日・・・別れてほしいと言われました。今日は無理言っ
て会ってもらいました」

「・・・」

蘭の事で頭がいっぱいだった俺は初めて園子の気持ちには気づいた。

そこまで悩んでいたのか・・・。

蘭の為に・・・。

「俺が園子に言っただけだよ」

「いえ・・・。私は別れるつもりはありません」

京極さんはきつぱりと言った。

「蘭さんはきつと意識を戻します。私は信じています。その時を一緒に待っていていようと思います」

俺は京極さんのはっきりとしたその言葉に救われた気がした。
そして彼は笑いながら

「大切なものをあきらめる事などできないですから」
と言った。

俺も

「そうですよね・・・」
と言って笑った。

京極さんが時計に目をやり

「おっと、園子さんに怒られてしまっ！さあ、行きましようか」

「えっ？」

「蘭さんのところに・・・」

「ああ、そうだったな」

俺は京極さんと共に蘭のもとへと向かった。

いつものように病室の扉を開くとそこは真っ暗だった。

「園子？」

俺が目を凝らしているといきなり電気がついた。

そこには園子だけでなく蘭のおじさん、おばさん。俺の両親。服部と和葉ちゃん。阿笠博士や歩美ちゃん達。目暮警部や高木刑事達。

皆が・・・そこにはいた。

俺が驚いていると

「新一君の送別会よ」

園子が俺にグラスを渡しながら言った。

「蘭は新一君の見送りに行けないでしょう？だから今日皆に声をかけて来てもらったの」

皆が俺をみている。

「でも・・・なんで・・・」

蘭のおじさんが

「よく...決心したな。お前がもし日本に残るなんて辛気臭い顔して

言うようなら一発殴ってやろうかと思ったが……。まあ……。その……なんだ、頑張つて来いよ。待ってるぞ」
そう言つと俺の肩をポンと叩き、そそくさと目暮警部達の方へ行つてしまった。

ありがとうございます

俺は心の中で頭を下げた。

「よう、工藤。泣いてないやんけ」

笑いながら服部がやってきた。

「バーロー。なんで俺が泣くんだよ」

俺は服部にも感謝してるんだ。

「つまらんやつちやのう。こういう時は泣くほうが盛り上がるんやで」

「じゃあ、お前が泣けよ。あれ、和葉ちゃんは？」

服部はキョロキョロしながら

「さつきまでここにおつたんやけどな」

と言いながら辺りを見回した。

「トイレちゃうか？」

服部は高木刑事達の事件の話に鼻を嗅ぎ付け（？）サッサと行つてしまった。

俺もそこへ参加しようとした時にベランダに和葉ちゃんの姿がみえた。

思わずベランダの方へ足が向いてしまった。

「和葉ちゃん？」

「あつ、工藤君。アメリカ行つても頑張つてな。応援してるで」

「うん、和葉ちゃんのお陰だよ。本当にありがとう」

和葉ちゃんは顔を赤らめて

「嫌やわぁ、アタシ何もしてないで？でも・・・」

「？」

「アタシも決心がついたわ」

「なんの？」

「・・・アタシな、留学しようと思ってんねん」

「！」

俺達の後ろでグラスが割れる音がした。

6話 3日目 (PM) (後書き)

和葉の決心は堅いようですが…。

7話 3日目 (pm2) (前書き)

平次と和葉側の話になります。

7話 3日目 (pm2)

「ほんまなんか？その留学って・・・」

服部は信じられないという顔で和葉ちゃんをみていた。

「うん。ほんまや」

キツパリと和葉ちゃんは言った。

突然の事に俺も驚きを隠せないでいた。

「留学・・・ってなんや！そんな事オレは聞いてへんで！」

服部は和葉ちゃんの腕を掴み詰め寄った。

「冗談やろ？な、和葉」

和葉ちゃんは黙っていた。

「嘘って言えや！お前はオレのそばにおったらええんや！」

和葉ちゃんは首を振った。

「なんで・・・そんな急に・・・」

「急にやないで・・・。前から・・・少しずつ考えて・・・いたんだよ」

和葉ちゃんは小さな消えそうな声で言った。

服部は掴んでいた手を少し緩めた。

「何度も・・・言おうと思ったんや・・・そやけど・・・平次に相談するのが怖かったんや」

和葉ちゃんは下を向いて涙を堪えていた。

「なにがや！言わなわからんやろが！」

「服部！・・・落ち着くんだ」

感情的になりつつある服部に俺は抑えるように諭した。

服部は大きく一息はき和葉ちゃんから離れた。

沈黙する俺達に冷たい風がさらに強さを増していく。

「オレは・・・和葉にそばにいてほしんや・・・」

最初に口を開いたのは服部だった。

「行かんといってくれ・・・」

服部はその場にしゃがみこみ顔を伏せた。

「平次・・・ごめんな・・・」

和葉ちゃんはゆっくりと話を続けた。

「平次には警察官になる夢がある。でも・・・アタシにはなかったんや。アタシは・・・今まで平次のそばに居られればそれで良かったんや。」

そやけど・・・平次が事件で怪我をして帰って来る度に・・・心配ばかりで何も出来ない自分が嫌になったしもうたんや」

和葉ちゃんは自分の手のひらをみて言葉を続けた。

「そして・・・半年前に蘭ちゃんが事故にあつたやろ。蘭ちゃんに会つても何も出来へんかつたけど・・・でも、会つて分かった事があつた。アタシ、誰かのために何か出来る仕事をしたい」

俺も服部も和葉ちゃんの言葉を静かに聞いていた。

「アタシな、医者を目指そうと思ってるんや」

今まで黙っていた平次が

「そんなら！・・・留学せんでも日本でも出来るやろ？なんでや・・・」

和葉ちゃんは目に涙を溜めながら

「平次がおるから．．．平次がおると寂しくなる！会いたくなる！甘えてしまっんよ．．．」

「．．．」

「アタシは．．．平次に守られるだけは嫌や．．．守りたいんよ。そして．．．ずっと一緒にいたい．．．。」

服部はゆつくりと顔をあげた。

「いまのままやと．．．アタシ．．．ダメになるような気がして怖いんや．．．平次を待つだけでなく自分で出来る事を見つけないと。平次のためにも自分のためにも．．．」

和葉ちゃんは堪えていた涙がとめどなく溢れ始めていた。

「あかんのかな．．．。アタシ．．．平次と．．．ずっといたい．．．んや．．．そやから．．．」

服部は泣きじゃくる和葉ちゃんを強く抱きしめた。

「分かったから！もう．．．何も言わんでええ．．．！」

さつきまで強く吹いていた風が雪にかわるうとしていた。

俺は2人をそのままベランダへ残し部屋へと戻った。

今は．．．2人でだけにしておこう．．．。

俺はいつもの様に蘭のそばに座った。

「和葉ちゃん。留学するってさ．．．。蘭、知ってたんだろ？」

蘭は何も言わない。

「寂しくなるな。俺も行ってしまっし．．．。」

未来にはいくつも扉があり、今、俺達はそれぞれの扉を開けようと

している。

それは夜明け前にも似ていて、不安と希望が入り混じった気持ち
押し寄せてくるんだ。
だけど夜はいつか明けるんだ。

蘭。

夜はいつか明けるんだよ・・・。

7話 3日目 (pm2) (後書き)

和葉ちゃん白衣が似合いそうですね。

そろそろラストが目の前です。頑張ります！

8話　旅立ちの日　（前書き）

今までありがとうございました！

初めての連載がこんなに長く続くとは思いませんでした。

今回で完結とします。

駄文を読んで下さった皆様には本当に本当に感謝しています。
では・・・どうぞ！

8話　旅立ちの日

その夜、俺は自分の家に帰って身支度を始めた。

親父たちは蘭の病院を出て、直ぐにその足でアメリカへと発った。

特に用意するものなどないけれど、身の回りの最小限の物を鞆へと詰めた。

ある程度荷物も片付いた頃、服部から連絡があった。

和葉ちゃんの留学はすぐじゃない事。

あと1年はこっちで勉強をしてから行くらしい。

そうか…そうだな……。和葉ちゃんも大変だな……。

「オレが英語をしっかりと叩き込んで、和葉をりっぱな医者にするんや」

意味わかんねーよ、服部……。

でも賛成してあげたんだな……。

「お前にしては大人じみた選択だな」

「はは！そやる。なんやほんまに大人になった気分やわ。少し寂しいけど仕方ないわ・・・」

「・・・そうか」

そのまま俺達は無言になった。

少しなんて嘘だろ。

本当はすごく寂しいんだろ？

そうさ、俺だって本当は・・・。

下を向くと立ち止まりそうな心。

その心を振り払い顔を上げた空に

「「きれいな月だな（やな）」」

そして俺達は笑ったんだ。

「ほんまに頑張つて来いや！辛いときは愚痴ならなんぼでも聞いたるし、ねえちゃんの事ならいつでも見にいったるさかい」

ん？服部が蘭の見舞いに…。

「・・・蘭のそばには寄るなよ。絶対」

「なんもせえへんて！」

「絶対、寄るんじゃないぞ」

「・・・」

「・・・」

「安心していつて来いや。俺は好きな女には一筋や」

「知ってるさ」

「なんやねん！はよアメリカでも宇宙でも行つてこいや！」

服部が照れているのが分かる。

ほんと・・・お前つて分かりやすいよな・・・。

改めて言うのも恥かしいから、からかったついでに言わせてくれ。

「服部・・・いろいろとありがとう」

本当はまだ沢山の人たちに「ありがとう」と言っておきたかったけど・・・。

まだまだ先は長いから、その時にでも言わせてもらおう・・・。

今、俺は空港にいる。

搭乗手続きも済ませ、あとは時間が来るのをただ待つだけだ。

園子は蘭と一緒に病室から俺を見送ってくれるらしい。

蘭の笑顔を見れずに日本を離れるのが辛いけど。

「もう時間だ・・・」

俺はゲートをぐり振り向くことなく飛行機へと乗り込んだ。

待っててくれ・・・蘭。

お願いだから・・・。

蘭…。

目が覚めても悲しまないでくれ。

そして……蘭。

愛してる…それはずっと変わらない想い…。

「とうとう新一君行っちゃたわね」

窓辺で園子が蘭に話かけた。

「でも、安心しなさい。園子様がいつも一緒に居てあげるから外は寒いが、空気を入れ換えようと窓を少し開けた。」

「うゝ、まだやっぱり寒いわね」

白いカーテンがユラユラと揺れた。

ここはどこ？

白い天井。見覚えのない部屋の風景・・・。

「し……んいち……」

その声は、風の音と共に園子の耳に届いた。

振り向くとそこには

「園子？……私……」

俺は飛行機の中で眠っていた。

蘭と笑っている幸せな夢をみたんだ。

蘭・
・
・

君の笑顔に逢える事を信じて…。

完

8話 旅立ちの日 (後書き)

これで完結です。

その後を書く事はないかな・・・。

いや、案外書くかもね・・・。

気が向いたら考えたいと思います。

本当にありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1471b/>

夜明け

2010年10月15日23時12分発行